

寛
鯨
子

三



萬事ありき東國へ馬とて勢を説くお格入をせば使とて大は
 張子^{チヤウ}即時討ふとありし宗徒のくく六十二人、都合千餘、二十万七千六百餘
 騎とてゆつし世をなきて坐置のあるとてゆつし色々、倭中、吾、佐人、陶山、荻三
 葉、高小見山、次命、正俊、一族とて集て千餘を所、迎通り、あつたや、はる数日
 の戦、攻は死する者、幾千とて云々と不知、さき、是、皆さして仕おしける事とな
 して、死をせし骸骨、いまだ乾らるは、名ハ、途に消えぬ、同じ死する命と人目
 へ、余り、軍して死する名、幾とて千載とていふ、是、賞を子孫の事、常か
 ら、いざや、版原、今、一、取討して、關東、郷の、名、ぬる、我、未、斗、りの、邊、と、名
 攻、版、し、う、ハ、名、幾、古今、の、事、双、め、つ、べし、と、云、り、色、バ、多、傳、は、あ、つ、べし、と、い、い、
 ける、是、は、生、て、死、する、事、と、思、ひ、切、る、事、お、れ、バ、死、する、事、^{ミナタラ}曼陀羅、と、書、て、ど
 う、さ、う、い、ふ、事、ハ、九、に、悔、の、事、な、色、と、目、さ、ん、と、と、名、ぬ、暗、き、は、^{サシ}めん、忍、く
 明、て、面、と、い、ふ、事、抵、も、あ、る、事、ハ、た、刀、と、背、は、盾、刀、と、後、は、挿、し、葛、の、根、は
 取、付、苦、の、上、と、い、ふ、事、難、く、城、を、あ、び、入、り、本、堂、の、上、に、人、を、た、す、房

[illegible]

さしゆく美置の心とかしうあが下を隠れぬや
後房白濁と押ひて

いふせんをの玉陰をまよ色バ
 杉被あへ松の下處

此の事は神代入道松井尊人よま二人の者世辺の業因者なりしかば皇居隠れな
 く御する所せしもう張り樂の怪しげなりは扶載^{マシナシ}進^{マシナシ}せしと云ふ南都の内
 山、之よるこそ神只殿、湯妻臺は因色頼王令體を降せし昔の爰より又
 なりては之を後葉東山沙汰有と主上六六波降入しを治ひるが雲の上の御住
 在りて云いおはし事多きをお世時の音一魚り形端の月よりと云ふと云ふ

恒洲の板屋の軒の村時久
音と音ともと神をぬきり

又中宮の御方より
東の御所と云ふ
所より文の
主より

只ひや色塵チリのまへもるはのほろけとあへば愈る満ちを
 主と引込とく御あふ有るるな

涙の海を星々とし水の乳ハ忘れし

一 笠置落城の刻石を讀みし人々去歲ハ年束の計合は依て暫うとし
あられぬ新玉の如き庭に武家の御位ありて堀京便二人上洛して元衆流
刑部赤保定の刻石を讀みし人々去歲ハ年束の計合は依て暫うとし
藤原季房二人の歌料に依ては捕色ありし人々去歲ハ年束の計合は依て暫うとし
うきとる人々ありし人々去歲ハ年束の計合は依て暫うとし

世のれと何ぞいふ世の中のみきやんあると余はうら

又淨中紙を具行々とバ依る木道譽踏と云ふとて海念入下——ある如く道
よて方ひきくるは定りき色バ具行々世生をや少くひん直取の言と教ふとて
為るべき時——なるれどもやハ行と取りの色取の果
そわたりぬぬの指と云ふとて

りのみと思ふ親父の愛の世と成るものかと願ひの長を
今日の書つゝ涙をこぼそふありうゝがそふ

消
川の
石
常
れ
と
そ
ろ
の
ま
も
言
妻
の
末
ど
の
う
に
ま

平大納言所質はとバ市流の如く市向留しあると夢一は院で苑の如くをどくと東
 の東は歌とせたりん所^{イヌシ}をよなどくくち中々と夢流ひく

別るゝと何々歎うん君を洵でうきぬくとおぼる 都次

後死所あり病の爲に身も七つに一つなり中納言藤原公とハ名陰を
流さずは那の心中推量して表れぬ事を^{コノコロ}本中迄の間方なれば
客庭掃きたる女房の中納言いふ人目の終れや^{マキレ}病の如くと結ぶる
一札の交の幻さぞうめ文枕をとりし涙は千行に上傷よけ置へ
させ給ひければ女房郷衣冠とぬぎ戎衣を着せ休まらんとおどろ
び女房よりあんな米の炊くと知かく今更にもしえづともいふ
彼女房の住する所の器へけて見ゆは時とある中宮の云有てあり
ぬと人の申しさば中納言髪長の髪と切く親と去添へど並れり
是等の形をん^{ゴロ}そわがこハ是と今ハ何形をん
その後女房をよめて歸りの思ひは堪へぬ

書重——君の面を舟にうつす後の世までの形えやせん

とさきの初は書添と形月の誓と被入色大井河は身と投てをわかくぬくる
君が一日の恩のなまなき百年の身とあやまりととわやうの事ととぞやづき

寶丸宮ハ門幼稚ニありしすべし中納言宣明卿ハ敏達ノ都の内を以て有
 る計宮々多ク八歳子歟也流亡するが御心懐ハ^ナ為て主上の御事思ふにされ
 之宣明卿と被と君の御座ある白河ハ具しくあはぬと有る色ハ宣明令
 後と押ハ宮庭通きおきてゆぐ御供仕てもあせん幸う細有より公白河と
 中ハ郡ハ教有果代強く下る道とそなされハ能因法師ガ

らふ古ゆバ
履ともよ半
かど能風ぞ吹
ふ河の岸

上御しけりて道をく人と云ふは関ありと云ふ言ひもせむと申されぬれど
宮ハ肝洞と押ヲへるまじき作あるものと云うしが良有てさいの宣明殿とつ
をそゝあじと思つる處より張す中ものよ白河の宮と称する所の全く洛陽渭
水の白河は冬水不ばは舞ハ奥列の所也此年津守が隻が是と云ふをそ

手後宮お休おましよーつきて閑送りの武士。獨りせざるを

田氏きやうくしりし武士うなむとくもあふべーとを

三月七日既よる帝如とあせはるるつくる色ハ中宮ハ車よまぎさく六波羅の
所へり啓りしとせはひるる中宮の中の家殺きと云の事と及びのまふ
させあふ一節となく唯少涙のまきくれつと色なくらしむる所を傾くと
るぬる色ハと還所なしなるべし杯をへしめど

どうくの男ひきあしつきたさの命よさきむいつと張りぞ

と計りし外はるる色はひるる車のみを張るやうと世の事とあきあ心の
中こそおしり現明色ハ三月七日と奉りけりいさふとて中宮の中

ついはくはみ果るき身とあふふとあき所ハ何生色らん

いささみけり現明の又とあふふは篇とともあびむやとん

武士どもも年如よと路路と張るはと七條とあふ東の洞院とて中宮と
張るは中宮の光候あきと幕あふとくは出とり色ハ少なきと催しと張

よるのさしと備はる鑑の神とあふしる所供の人ととも一條路を文行房六條
少將忠顯所へり踏き三條所へり踏き也板橋井の宿とともさきいふ時八幡と所
裏と早^{カキ}とあふはとて二度還るの事也所新念有る時は路をさの中と
有るは中道とあふとる中元年石橋米の事の時橋水の使とともいふは
とあふはとあふは道とあふとる

あふはとあふは道とあふはとる鑑の内の忘りぬらん

とあふはとあふは道とあふはとる鑑の内の忘りぬらん

あふはとあふは道とあふはとる鑑の内の忘りぬらん

あふはとあふは道とあふはとる鑑の内の忘りぬらん

あふはとあふは道とあふはとる鑑の内の忘りぬらん

あふはとあふは道とあふはとる鑑の内の忘りぬらん

流く流く新あを凝して涙とまよふ立上り石の鳥居とあるとて見く色ハ我々と
 俱に討死しりる人見入道が書付くる教有りて側^{カタハラ}は右の小指と断^{クイ}切て血とみく
 一着と書添ひきて赤坂へ白ひるる則城中へ突入て敵大勢討取遂に父を討色し
 歸りて太刀とほろくして賀うさくくど失ちりるを後大將所為天王育と折きて
 赤坂へ世々ひるる時石の鳥居と見く色はちの住よ

菟咲ぬ老木の極朽ぬととそなとと苔の下の隠色――

武蔵國住人見四郎入道恩所生年七十三西曆二年二月二日武恩と報せん為
討死仕畢と云書うゝ又右の柱よ

まゝおしりと思ふ節は 逆らふ人の街の道と云ふん

と書て相模守、住人本間九郎資貞が嫡子源内長忠資忠は、年十八歳父が死歿と枕
よりて同じ政所を令へ止、畢又とて言ふ。　るさ色を今よりする迄石碑の上より消滅せる
三十一字見ると人感涙と流さぬをいふありき

一 正威の堂。千釵破の歌の意。都倉を覆言。騎術と云。一攻と云。と楠。二傳。

と程よく許されバ中へ攻入ル事叶はば食攻めせよと軍政止と色ハ儲軍
勢逆然ハ堪業々一萬石の連弁とぞねくうるを初日の発白と長海九部
れ也扇帳宗

光孝寺色也山極

服の工数二帝の尉

河と荒のまゝん

とを附くろる識は面白く巧よしと優なり
 氏御方とハ花はなし 船と虎は喻
 り色ぞ禁忌なりろる表ふるゝと後をも思ひ
 ぞと ぬと 諸國の軍兵ハ唯城
 とと づは守りろる存る計りあるある業
 一もなめりろる愛はいろる者ろ讀
 ろろろん古手と翻案して大將
 大佛陸奥守日蓮念近
 將監名賦をいふ
 の陣の前を立ろる

余はのこるやみん
葛城のふのふの峰の楠

一 元弘三年閏二月廿四日帝臨岐山、以生於所躬之女爲色伯耆女、潛幸之、

とて人の心より乞ふて、所々へ送らばやとれとあれと、聖と文とあてを求めとて居
けり。軍しと願狀一けれ、貞俊所へ乞ふ喜ひと、敷皮のまゝ居たりと、一首の歌と縁
じ、雨は首とてうとせり。

皆人の心より乞ふ時、好むとて憂はるべきを、我なりとて
今後、雪ハ心とて、梅とて、深倉より下り、彼女房とて、出しとて、あゝ色ば、書室ハ唯、源
の床は、伏流とて、あはし、何とも云ふ、しづ、側ちふ、硯とて、刻あせとて

誰見よと、形見と人の心、さうらん、堪てあづき、命あらぬとて
と書付、形見の刀とて、劍ハ、実立て、急よとて、あなくぬとて

一、二、三、新れ、入道とて、常東、隨ふの、被官とて、しめ、さう、一、二、三、時とて、なとて、天、下、下、隠れ
あつた、色され、不義の、改道、日々、は、つ、統しめ、せ、世の、危、あ、ん、事、出、出、て、時、と、諺、と、
納し、とて、あ、ん、入、道、は、水、引、あ、つ、た、とて、世の、中、あ、つ、た、き、なく、や、思ひ、ん、盛、なり、し
時とて、あ、ん、出、道、世の、身、あ、つ、た、あ、ん、同、あ、つ、た、再、人、る、と、出、とて、お、ひ、せ、う、し、が
深倉の、事、とて、深、倉、は、觸、し、心、と、動、ふ、とて、あ、ん、多、つ、り、し、く、あ、ん、一、度、常、東、の、有、名

とて、見、つ、た、とて、思ひ、か、し、て、あ、ん、と、出、る、とて、花、坊、の、柱、とて

故郷より、とて、歸る、とて、おし、ち、れ、歸、は、り、ぬ、墨、の、衣、次
と書、か、つ、た、深、倉、は、は、れ、く、り、あ、ん、と、あ、ん、この、燈、籠、とて、深、倉、は、は、れ、く、り、あ、ん、と、あ、ん、
旧跡、何、とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、
源、とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、

あ、ん、乃、若、水、は、ん、ど、と、と、う、れ、る、の、原、とて、思ひ、ち、さ、は、

とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、
とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、

一、二、三、入、道、滅、び、て、後、き、ち、家、一、統、の、所、代、とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、
せ、一、人、とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、

墨、深、乃、色、とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、

一、二、三、里、小、路、中、紙、言、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、
とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、の、針、花、々、とて、秋、の、夜、深、々、とて、あ、ん、

元世し^に伯夷叔齊^の潔きと^を誦^し跡^を追^ひ求^めて未明^の道^を歩^みし^をい^ふは流^る名^の所^に
 跡^をの^るを^もて大内^の山^の月^を影^をと^り照^らす^るて^を連^るく^を陳^の氏^の車^をと^り宿^を所^に入^りて^を遣^はし^し山
 の岩^を藏^へと^り所^にを^りた^りを^いは^すて不^二房^とと^り偽^とと^り戒^を所^にを^り請^をと^り遂^には^を多^く年^を并^に趨^をの^を儒^の冠^を
 と^り解^をて^を十^を戒^を持^を律^をの^を法^を體^をは^をめ^をい^はす^るは事^を敷^を聞^をは^をな^しと^り色^をバ^を君^を尊^をる^を事^をと^りて
 之^をを^り下^をと^りを^り出^をし^し再^をび^に輔^を佐^をの^を位^をと^りめ^をは^すべ^しと^り又^を宣^を房^を々^をは^を後^をと^りし^しれ^はと^り此
 は^を岩^を藏^へと^りを^りた^りを^いは^する^を事^をと^りて^は

何事の義一とて帰るべき事なきを厭ふ也

とつへしか宣房の若衆は泣く涙の多い中納言入道殿は主相何れもなくおそれ
日勝の宣房卿の歎を押しとて主住持のいふ言を聞き見送るは誰兄よとて
書おける一着の衣は障子のよきあきなり

山は浮世の人より嵐や
庭の柳よりよん

棄怨入世為善實報恩者と云文のト

白頭望斷萬重山，
膽却因收盡底，
不是胸中藏五逆，
出家端的報親難。

と黄蘗の大義渡と別やし古き公こうと書きとる相こそ此人このひと設たて何なんと有とと命の
内の再唐叶さいたうがふあじやうとと空居郷くうききやう渾こんは咽のどびく空くうく降ふりのまじり

一説に、武村大徳言、安世郷の所許へ、重の御文きて来たりと云ねせり。君が位、
室の何なりともあるべきをぞ、若し濡れ墨深の袖。是をんすは、落房郷の所より
うそ有りなり。然るえもひて所と尋ふべしを、それと差一三人史如し又敬安玉
彦の、梁山寺内、狂ふる屋吹くをぞ、一条少将のありあは、落房々々、今より、代経の
有つる石と明くし。まゝも又、落世の人との、今より、落房々々、今より、落房々々、
と、おろしし、落の跡のと、おろしき、おろしき、おろしき、おろしき、おろしき、
雲

西園寺大納言公家々ハ故相模入道の舎弟四郎也也入道と隠し至極の得友の
 時ハ有しかば出せし由一紙を以て是より色紙に書きて大納言殿にのたまふ
 向ひまひより我身かく列人とばき接し毎の如く酒を嗜み酒をめぐるは親とも門身ハ唯
 なる由事とせん取ししかば我友の如きはいふゆる然ハ一き所ハ此うあんとんと
 とてさへ後の雪舟の迷とぬぬづふえてゆへとしを色男の子ともいふ哀みの懷の中
 小くとかしきやをし是を我友は傳ふ所の物な色を見ぞうし親の形見ととなし
 是とて上原石上流泉咏木の秋曲と書きたる歌詠の謗を一帖膚の護う
 取出しはひく此のちうづうなしめひくが側方の破りたるを上巻の紙は一頁

の歌とよみたる

あるをさうり日新ゆる此落の牙は思ひあつて梅子の花

去程よりいふ流罪は極うき歌より雲と出しある時中院中将定平卿を國
よりいふ君和長年より白く果とされける時教しなせとの詞と心は長年大綱を
殿はをさうりつてうり代は剣を腰刀と振て問首と捨てしうり是とんうりや
のるの問心の中やと中りく思ふぬべしふ後は小のる八仁和寺の辺に倭い
て安月日と送るははるが問産事能なくしてある君生をさやうりやを色を
昔なりふ弄璋の問や天下より川本の車馬群とをさやうり桑のうり
人もなく蓬の矢射る中よりさやうりやをさやうりやをさやうりやを
る色をいふ問心母など問心とをさやうりやをさやうりやをさやうりやを
友はねる問心つてとをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやを
せとをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやを
若君をさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやを

思ひは思ひしあるやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやを
ある問心はさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやを
べとをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやを
傷と乳のあはさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやを

使は文とあはさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやを
とをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやを
とをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやを
とをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやを

一石原入道空圓とをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやを

世の爲に清くしをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやを
とをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやをさやうりやを
も氏と初とて諸國の船歌都へ討てよとすといふある者うりやをさやうりやを
陽明の扉

賢工の横言はなる世の中ハ上と下とをさやうりやをさやうりやをさやうりやを

と云ふに又此度の合戦は於て忠者ん者とは不目も恩賞なりと云ふ壁書
決断所は押せりとは見てそ事書きの奥は例の落書と云ふなり

かくちありとらるるや論言の汗の如くもなごかがるらん

是を時入通賊亡の後家所斗ふとて賞功の如くも成りてなり

為氏都へ攻入りかど主上とて山門へ引率あしむる新田楠を山法師亦きん三井

有は後家所と成りて後家氏とて戦ひて三井寺に押あせり愛がしんが

とてつる大は成りて防くとも叶ひぬとて大勝討せり或は徒金堂乃

本家の所斗ふとて敵の中は隠し金堂の首とて多くの中は金堂を切目

とて付せりと成りしとはとんて山法師や志しぬとて一着の寺は事

書と添ふなり

建武三年の夏に建武三年正月何と云ふん事の強き後家へ送りし

子三會の曉は成りていひてさへ八相成道して説法利生せんと思ひ

金堂の乃へ立おされば成りて盛は成りて後家の闘闘四方はつて何事

思ひ分るも成りて成りては徳地場の基に成りて堂の内へ入りあはく語と

いひ我首と仰りる阿逸多といひて叶ひぬとていひぬとて思ひてけり

少と我敵といひていひていひていひていひていひていひていひて

そ後家都の合戦は足利の八指戸新田の二首の勝は討負これと云ふ

ハ又細川定禪の三百余は追ふる勝は智恵は力なりと云ふ人傑と

又楠とて軍師とて山門へ降りて日傍と云ふししてさのさの敵は新田北畠楠

己が家徒の七人といひていひていひていひていひていひていひて

是と云ふ相を相軍といひていひていひていひていひていひていひて

獄門はとんとと押せりといひていひていひていひていひていひて

不しとて面影の如く首とて獄門の事と云ふ新田は後家相負捕河内判官正と

甚勝とせしめられしなりと云ふの者仕りしなりと云ふの側は是と云ふなり

中さけりなりと云ふの事なりと云ふの事なりと云ふの事なりと云ふ

候は候なりと云ふの事なりと云ふの事なりと云ふの事なりと云ふ

候は候なりと云ふの事なりと云ふの事なりと云ふの事なりと云ふ

疑、きく人よりても沙りたるまきーげりるき 楠が首

と狂歌とれ、書てもまうるを後楠が首とばかりの、送らるるを

一 當氏系、お入、やど主上を山門、の幸ぬく義貞等とて都を攻まを、
義貞を敵と一檻の中、編の機と矢い、らんが、る、四國、河孫院が、
い、た、て、算と、焼、け、き、ば、東、寺、の、海、の、る、敵、と、て、て、り、影、し、の、算、大、
や、り、り、色、は、高、孫、河、守、り、敢、ん

多くとも、四十八は、き、よ、と、ま、じ、河、孫、院、が、幸、よ、と、人、算、大、
さて、あ、う、て、合、戦、な、う、と、及、び、る、義、貞、等、は、お、負、わ、國、の、方、を、赴、つ、る、仍、て
上、上、を、都、に、還、幸、有、り、色、た、る、氏、情、な、く、あ、り、あ、り、し、ふ、又、都、と、出、給、ひ、
潜、は、吉、野、へ、遷、幸、し、り、る

一 宇都宮公綱を山門より主上と供奉し、あうて都に入るが、び、つ、囚人の如
ぬ、と、も、あ、う、る、さ、き、と、い、ぬ、ぬ、き、際、も、有、り、色、た、出、家、の、解、は、ぬ、て、徒、は、
る、を、と、惜、し、と、あ、る、者、や、や、り、ん、門、の、廊、は、山、崔、と、画、は、書、き、り、よ、

山が、う、う、この、と、是、と、う、つ、の、ま、都、は、入、り、出、と、や、ぬ、き

と一着の程、き、と、ま、う、る、是、は、蘭、代、等、も、同、く、囚、と、ぬ、せ、れ、る、身、護、の、際、
と、い、て、中、國、へ、近、り、る、を、あ、の、と、い、ふ、し、は、宇、都、宮、の、都、は、あ、う、り、れ、ど、お、は、し、み
一ぬ、べ、し、又、山、徒、の、祐、亮、と、ま、者、山、門、あ、度、の、臨、幸、は、軍、政、と、ま、げ、ま、し、武、家、は、
う、り、は、い、な、因、ら、し、十二、月、に、九、日、は、斬、ら、き、う、が、一、着、の、身、と、ま、み、り、る

大方の、の、言、ど、と、思、ひ、一は、我、身、の、果、と、ま、き、り、り、り、

一 中將義貞を春宮 恒良 一宮 善良 と供奉し、と、敵、を、金、金、の、機、と、楠、を、れ、

し、ゆ、を、い、は、せ、と、い、て、是、利、屋、張、る、る、大、勢、と、幸、し、て、攻、め、ら、り、る、が、え、ん、此、生、兄、等、ら、
此、山、の、陣、と、攻、め、る、後、は、陣、を、と、攻、め、ら、べ、し、と、い、ふ、ん、重、さ、海、と、引、き、る、此、生、
兄、等、を、と、い、て、敵、は、早、と、こ、め、さ、べ、い、送、る、は、討、捕、せ、し、て、此、山、を、お、て、出、る、陣、が、長、
と、敵、ひ、る、が、大、勢、は、取、冊、を、し、此、生、判、官、を、身、茂、瀬、房、里、見、修、貞、等、三、人、脱、し、討、死、せ、ん
と、い、け、る、と、見、る、は、判、官、を、身、茂、瀬、房、里、見、修、貞、等、三、人、脱、し、入、送、三、人、と、若、し、討、死、せ、ん、と、
し、り、る、と、身、茂、瀬、房、里、見、修、貞、等、三、人、脱、し、入、送、三、人、と、若、し、討、死、せ、ん、と、い、け、る、と、見、る、は、判、官、を、身、茂、瀬、房、里、見、修、貞、等、三、人、脱、し、入、送、三、人、と、若、し、討、死、せ、ん、と、

けき所初思ひはぬきとせめて御心と遣るものと或時御車より色如衣の乳
官へ傳ふに流し所の河水と河の水は結び色何となく河は道違せと云ふも
昔業平中ねの意せしと所後せし事も哀なる思ふ事と云ふ

折るも神やうきん影とのも所は流河の流きあのを成

と傳ふと流しうの時と一村の道は河の本の中流に立湧と御被と云ふ色
くさる目ともや書ぬと声して所車と裏くと一峰と西へ通さるるは誰
桐宿と知ぬお味しうるも機音も高く青海波とを個へる怪やぬかな
くぬんと所車代駐せとて逢へ見入るをいふきばるる人ありと云ふは
て所は原高く提さるるの程二八中りなる中流の云けりなる所と云ふは秋乃
別と暮ふに流と弾むるもくは有る織^た碛^た珊瑚^た一面曲氷落玉盤手
万声かき鳴しうるを流る處の流は給きつと云ふは流るる材めは所被
と流るるやうと云ふは所目と云ふは所流と云ふは所心と云ふは所
とせめて流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるや

る宮へ還河ぬと後うりとも云ふは所乳と云ふは見なぬと流る所廻ると云ふは
さうらるる二条を流るる所は流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるや
有のるの月と云ふは所流と云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるや
川右左公頭の中と云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるや
宮の所^し画と云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるや
ゆつと云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるや
流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるや
と云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるや
よき非と云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるや
一と云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるや
貞觀政要に流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるや
一と云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるやと云ふは流るるや

止るべきと欲じしと宮熱々としてさうな何れだ古の君きかく賢人の練は就て也と
ぬむ心と棄るひもどきうめなる我色べ脱す人の云名脱て事定くる中と避
て人の心と脱らんと思はて所心の中き意おしよせぬひおんを後所文とぞよ
出地と出所作とのとあまうん徳大寺は事いさうあびた地は宮おんどの所心
掛らきしと争う便りなる軍の有べきとてあけぬあまう道とぞく色バ
宮と今き所懐くなく重て所文の有りよつとてあまう

あまうや塩やく浦の塩とは思ふ風なびくちりひと
如と能う強敵うし心我あつて思ひたふあめりきバ銅とぞく

まぬへき 憂るなとうの思ふびき風は煙の蘇るさうめや

まろしと心の下紐打解く小水の根と河馬の水の心と後めり所契とぞめ
ちりき後天下の乱物事と宮き大仇の細い流きき流ひしと所是所ハ後り都
けりあひと強き一づきと何しとるる遠き泰武文と者と所代とて宮の相
一より端へ赴くをぬらん上止まりしと尼ヶ寄るて松浦書斎と云武士武文

とまゆと所是と奪ふ己が船よのをまう九国へ下る上浦おしとる鳴門とる所御

悪風 さきよ所是所代を事あると舟よのをまうとる所武文流きと見是所棄
返さんとはさうとて思ふと流す叶ひと海中は腹うき切て死しとるるさう
は所まきと松浦 吹る所は船とくつとんとと所は船中の者やうハ是ハ何
船とあやうとる

松上臈と竜神の思ひ中なると完へう色情なくは上臈と海へ入る
二百人の今代助とんちけきば松浦を来情なき思はきとる今や脚る

と所是とあまうと所代とる所是の深くハ仇の細い流ききとるあひと
宮とあまうとあまうと浦は後を流して海へ入るんハと所役船とる一

人の信是と見と大に別しとるは松浦と寄るをせバ教しとると止けき
小舟一艘引下して水主一人と所是所ととるさうとる浪の上と浮べらる

さきと所代とるやとるあひとんハ所代とる武文とと所は流きしと所是
所は所代の中は月日と送るはと所代とるがと家一統の所代とて一宮

と都へ帰入らるはし時流路の武文と所是とるさうとて所代とる
所代とるさうと都へ帰入らるはしと所代とるさうとて所代とる

何れも身と浮舟のふぐと有べきと或時陽明の傍へ引ひくが時人多く立ちあて
あな哀れなどぞ何事よかと立寄て見ゆぐた中快義貞のふとわけら色くするも
有る内侍を二目も見ぬ位に別し引ひくが時人多く立ちあてあな哀れなど
流さぬきなりけりそ後内侍と相争の故と別し往生院のわづらる樂の
麻マ明書と引ひくが時人多く立ちあてあな哀れなど

一 浮中絶言顯家 ハ昌隆大相言 入道之子 陰裏の軍兵と接ひ入道と平けて美濃とあ

こしるは色く上 後醍醐天皇 ころぬをわしれ事ツホは流し引ひくが時人多く立ちあて
の流と 弘治二年二十一年 和泉院無期を討死 消さぬひくと刑部正儀成がそきへの有知とあ

流く倍るふと燈の消る振すらんこの門心きぬる所文の卿はい計り
せんひよう

そとてしひようや中ひようは世のそとひようは世の
形家々の中ひようは世のそとひようは世のそとひようは世のそとひようは世の
所心代の世はそとひようは世のそとひようは世のそとひようは世の

玉の緒の流とそとひようは世のそとひようは世のそとひようは世の
そとひようは世のそとひようは世のそとひようは世のそとひようは世の

そとひようは世のそとひようは世のそとひようは世のそとひようは世の
そとひようは世のそとひようは世のそとひようは世のそとひようは世の

いづくは心とそとひようは世のそとひようは世のそとひようは世の
見房卿といつ所料は物おもて立出ひくが時人多く立ちあてあな哀れなど

見とせぬは有明の月の最さやうは山の端ゆく見へしれど
別るせとあひと思ひぬ三苦野とそとひようは世のそとひようは世の

安那野とそとひようは世のそとひようは世のそとひようは世のそとひようは世の
ふとせとせとせと

いふ人形の形見の野を道の竹枕もむししの流りあふ
夫より天玉寺よりひいふ井の水の月より松の木とらづらへ

へき烟となし情從隔りて角こそと悟りけしむ哉我守持とは字をなして度重るば
 情よりよめる事とこそあせ文なりて見えてやとて兼好と言ひける能書の道世者と云
 るそてねえ重なる所は、ト言とぞいふもつゝある也事一連一と信市は便帰りて南文に
 もよみながらあけくさるる兄は、レ捨らるる人目は是れと相傳りていとどヤリある
 あり、ト華卿書公のあらまじり、ト師直公等と傳へおきて、ト是れは文とあせども、ト常々トつた
 如きの有りとはいふべしと打笑あれど公等人は岩ありとも暮少は熊
 とぬ者やゆづきと一度きとて師直といふと師直は代りて文と書くるが中く
 てもあきなり

足ひきへちや觸ると男ふもぞ秋文をぐく打と昼をば

押しては文を携て行くよ。女房め、思ひらんやと見て顔赤めの袖に入て立ち
と便さるゝなり。わしうべと袖を知ると所居のいふ小の中色で重きが上の小衣
と針のちねて内へ紛き入ぬ。便所にてひとと話を師直疑しげな打聲にて聴て藻
草等ともある。女の足車にはあつきが上の小衣とちねて立ると便り中ハ衣小袖と

色とみやを事につづいとあつるべしと云々色を以て是と新古今十戒の序よ

ふみきぐよきぐよの小。中衣。我妻なりぬつまふきぐよ。そ

と云奇の意とて人目付りと憐れゆめとこそ見えゆへとせられし師重は又後金作
のち刀とて自^{テツヤフ}華師ちよは別色なるを後も侍従と階にひき一^{ヒナエラフ}向云をしと色た
ぬは心もとほつごきと師重まろと業じしとて塩沼列貴隠傳の念有る將軍^{そゝ氏}
りぞ被しける塩沼は事とてけしとえんごの時と人と割れと云事ありとて本國
よゆりて一族と促して師重が病よ命とせんと得年とて寺戸名山庵へ別送へ措
ぐ師重はゆりてと病うらる又身重き病なる二十余人とて女房子とては附て丹波
館よりと病しける此中ゆへと色バ討自として山石時氏桃井重常と重忠の境なく追
そとる女房と見方とと病る者重忠とて山陽道と下らんとて危病とて措テ
玉蔭山の宿進屋なる客よとて桃井が病え進付ては女房とて集取とて執事
師重の病よ叶ふよし是れなく抱きとせとてゆりてとて塩沼が意重け付也

としめられるものごとくふたふたおつて奈れどハ下るあじとて以尼とバ
多の橋よりおぼろしく又あつて菊亭殿は押さへて世女房の御りより扇は押さへ
えれハ女房の童共一人推さるる是と捕へて責問けききき女房ハ直来飽浦
三喜れあやうと人志深くこそあつていひと語りきハ肝秋孫孫と居るひ
そ佐能浦を宿所へ推さへて討たんとて談しつる三喜れハはたとて自ら
道色難きよ依るそ身と居しつて多年粉骨の忠功と棄てて官方ハあり
おぼろしく心のちか山様ささる口風ハありもこそとありき
と續くしハ人の心の花なりつるそと又思ひ知るそと淡るしかり

一
の御時年内侍と云るは若少無後基の娘とて或は御前と降賢々
實世々宗房々杯作り流ひるは御酒場つれんと世因侍御と器持て半一あり
しらん取寄して計り破れきと所系々の取あげえんそとせひれハ
孟とてと色とていづる雲れ上
と一あれハ心よげ誰の賈つとしと秀は取なさせひききハ宗房の御

星のくいのの初めりきとてや

といふは鳥をさへにひて夜と明つんとするは御酒場つれんと山
鳥の夢のやへおぼろしく降賢々

くろんこつとてや吉野の山鶴れもかしおと一ろの夜ぬ

柳世勢内侍とてハ形人ハ歌へきと高武を寺師並流く心とけ文の教と
おふおせりよとん多びるされも一夜の居るもあつてきと解りもあつて
解りもあつてきと解りもあつてきと解りもあつてきと解りもあつてき
難なく内侍と身ハ平しつと色とて帝正行が目此の忠節又ハ夜の夢と解
威有るハ此内侍と解りよとこのことつ有き色とて正行畏る

危ても無きちがふバとてあやうのみの笑をいひて

と養を辭しよりつとて討つ心難く荒へては後思ひあるききとてい

惜とていより

おぼろしくあつてきと解りもあつてきと解りもあつてきと解りもあつてき
いとあつてきと解りもあつてきと解りもあつてきと解りもあつてき

世の常なる武夫を欲するは身を以て身を以て祖とすべし永く其の徳を
色と人々を教とす此の志は祖とすべし我邦の武士我功勝色たる
人多く其の志を祖とす此の志は祖とす此の志は祖とす此の志は祖とす

一 楠常刀正の無面四十三年具て吉野の天皇にありまう先皇は元弘天皇の御
廟より今なる軍へ定て難きなりん昔程なりん西行討死はるべきは眼と
して如意輪堂の壁板は各名を記す書つて後てそより西行

西行討死はるべきは眼と

西行討死はるべきは眼と
西行討死はるべきは眼と
西行討死はるべきは眼と
西行討死はるべきは眼と
西行討死はるべきは眼と

一 西行の墓所といふは若の仕業もや有らん

楠の迹のあらうとあつてをせむをせむとせむとせむとせむとせむと

一 貞和五年四月のひる天は不思議に打流すは路中より田常と敬事法とあり
將軍 又是と具てしる事ありしされはあふ是と定すは知るは是と

往費に相換入るる一財と説く今大樹の好むは是と定すは知るは是と

又同年六月十日將軍田常と敬事法とありしされはあふ是と定すは知るは是と

云なりし公卿は長門跡よりある主権并二品法親王とありしは人々を

中より及我者らじと機を打ち見おしめけるは將軍の所機をの辺よりある

中より及我者らじと機を打ち見おしめけるは將軍の所機をの辺よりある

中より及我者らじと機を打ち見おしめけるは將軍の所機をの辺よりある

中より及我者らじと機を打ち見おしめけるは將軍の所機をの辺よりある

中より及我者らじと機を打ち見おしめけるは將軍の所機をの辺よりある

又二条平家公卿と所次じぬはうとやりては

田常乃將軍倒しの機をもち王をありしをせむと

日くれとあり

去年を軍に自る機を討死のふと日じ 四條より

是より事々非と云々今より増はれり人々色ば山伏一人或は機なる程と推す
見へるや如きは倒色と云々天物の不為と云々あるは沙汰
將軍 （民） 兄 （民） 不祥事と云々觀應二年京都にて合戦の時將軍の所
將二弟高武藏守と大將と云々四條と云々押寄る敵挑井左馬次 （民）
是と云々車山と云々後より河と云々度と云々後肩と決せんと輝りて
流石と云々あるは右と云々と云々此より云々挑井が勢の中より
長七人計りちる男の勢ある血眼なり。が六威の度は五枚鬼の流と云々
るは紅の月の日半しと云々同く夕陽を耀し櫻木の棒の一丈伝うと云々
と云々八角子削と云々両方と激入右の小将と云々白瓦毛なる馬の左く
是より白沫と云々一海河系面と云々高き中けと云々敵勢は臨む人
ある村を心と云々と云々今此合戦は元政清と云々と輝りて日來此
と云々人々をせんと思ふ人々人々知るべき身と云々ある解と云々
あるはゆへに名と云々と云々清和源氏の後胤秋山新羅人元政と云々

王氏と出てをめと云々と云々勝る武略のあはれと云々数代と云々
せん事と云々せしる細雅の首と長年のと云々至るも無法と云々
但黄石公の子房と云々授し和天下のあはれと云々西史の事と云々
馬の更傷と云々能客高離の天物と云々九命と云々授しと云々
政と云々仁本細川高景と云々中と云々吾と云々人々と云々
即出へるや打ちて見物の危の懸と云々呼りて勝ひ傷と云々
授と云々秋と云々と云々丹堂と云々阿保肥前守忠實と云々
連戦草毛の馬と云々唐後威の度と云々虎の流と云々四十八寸の長
しと云々のと云々一騎大將の中と云々事と云々再と云々と云々秋山
の所廻式と云々戦事と云々阿保肥前守忠實と云々中と云々元弘建武
己後三百余々の合戦と云々所方と云々強と云々堅と云々輝く事と云々
と云々比と云々の精と云々畠水練の言と云々人々し忠實と云々
坂の廣言と云々吐と云々と云々馬と云々歩と云々と云々西陣の長と云々

とに能くする事目のありきなりし唯事と云ふに二心なき人と云ふの所と
す。然しと我國は千古の武家なれど、今も希少なり。此其法より、楠正成の如き武士
を多く中にも色どる。必しは、用信とて、左記の如きと熟考し、楠公の心と汲み、忠勇
の篤きとさるべし。後醍醐天皇、正成の忠諫を用ひ、乃ち尊氏の威武、皆大に
天命、武家、陽謀と云ふし、死と極め、乃ち、時子息、西行は送らるる状

今、度々、人々、下り、事、非余之、我等、最期、通く、と、是、公、死、ハ、忠、義、成
長之、忠、義、重、ん、座、なる、は、義、重、キ、如、更、難、道、は、ぬ、人、後、亦、多、心
中、可、証、察、ハ、不、備

五月日

正成

楠正成

義者ハ仁義忠信と誓ふ。天理の必然は死あるといふ。故に最期の書牒を、激
ぜる事言外に傳ふる。惟、可、感、涙、と、あ、と、さ、る、る、魚、らん、や

村上天皇義輝と大塔の宮の通長と云ふ。バ、忠、義、公、卿、ハ、宮、祿、ハ、吉、野、城、と

後、さ、る、時、所、旗、幟、と、掲、げ、り、自、ラ、と、稱、し、漢、の、紀、信、ハ、忠、烈、と、云、ふ、以、此、陣、と
實、に、公、と、推、し、所、命、ハ、珍、う、深、く、自、教、ハ、傳、ハ、公、士、と、る、者、以、人、の、善、動、と、多、時、と
あ、や、の、中、る、中、者、ハ、至、る、道、深、と、傳、ハ、て、そ、を、受、得、と、感、ぜ、ん、と、さ、る、者、ハ、し、泰、と
宮、の、所、命、ハ、代、り、所、命、と、相、あ、し、と、さ、は、る、凡、人、ハ、あ、ら、び、武、士、と、る、者、の、目、ハ、三、公
より、と、さ、る、者、ハ、し、あ、ら、び、武、士、ハ、あ、ら、び、と、宮、祿、の、さ、る、と、い、ふ、と、さ、る、者、ハ、と、人、と
早、む、公、の、ハ、志、ハ、仍、て、一、刀、の、僕、と、さ、る、と、諸、候、と、も、取、べ、う、ハ、

一、太、記、の、評、判、と、い、つ、る、書、を、正、成、と、公、と、し、て、傳、ド、る、者、ハ、正、成、の、志、忠、義、と、云、と
一、と、一、毫、の、私、ハ、く、傳、き、時、ハ、あ、ら、び、自、承、の、深、く、如、し、人、情、ハ、あ、ら、び、士、卒、の、信
傳、さ、る、法、と、お、し、是、と、傳、し、と、云、ふ、ハ、故、ハ、士、卒、將、と、さ、る、と、疑、ハ、背、く、事、ハ、し、家
臣、良、臣、ハ、人、と、し、公、と、さ、る、と、し、裏、切、と、る、者、ハ、し、是、ハ、故、ハ、公、實、と、さ、る、と、し、評、者、乃
言、ハ、正、成、と、い、ふ、公、と、い、ふ、公、と、志、功、利、と、主、と、し、て、意、識、の、私、ハ、お、つ、る、也、是、正、成、の
法、と、知、て、正、成、の、志、と、あ、ら、び、る、也、也、と、事、と、論、ぶ、る、不、理、と、云、ふ、と、初、ま、の、力、と、長、き、
よ、い、ふ、事、也、也、也、功、利、の、私、ハ、志、掩、つ、る、と、さ、る、と、あ、ら、び、る、事、ハ、時、ハ、大、ハ、心、佛、の

害ありきと書と諸者法と力力の働くと取べくしてそむかざるべしと云ふ是も
甚深判と見るの傍に一切の事と書と取べくしてそむかざるべしと云ふ是も
どと云ふ者なし凡て相執ある時其害あり捨つ時其利ありと云ふ事と云ふ
て不正と云ひざる時其害なし同利と云ふ利の私を情捨つべしと云ふ事と云ふ
曰恭と云ふ事と云ふしと云ふ事と云ふ官軍の官根と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士
武田土屋桃井石堂と云ふと其八人連判の相執紙と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士
其氏と云ふ事と云ふ中云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士
憤る事と云ふ其氏相執ありしと云ふ一姓と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
と云ふと天下れと云ふと助けたり何ぞ其身もと云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
解の思ひと云ふ事と云ふしと云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士
臣のたゞと云ふ事と云ふ有るべしと云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士
と獨りし身の一戦は利と云ふ事と云ふ天下の人と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
美貞又相執なりと云ふ事人豈能と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士

色んより屍と軍門は晒して居ると云ふ其の後常は油さむと云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
しと云ふ事と云ふ美貞は云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
評判は曰新田の中ねと云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
武の道と云ふ事と云ふ是は諸者功利と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
なく事と云ふ事と云ふ忠と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
家の為と云ふ事と云ふ唯一身と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
の私心と云ふ事と云ふ不義の言と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
ざる事と云ふ事と云ふ元來新田是利の事と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
は云ふ氏相執なりと云ふ事と云ふ今美貞家の為と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
の事と云ふ美貞は云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
しと云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
る事と云ふ事と云ふ曰三代の楠智不足と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ
と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ其の伴曰東國武士其氏と云ふ事と云ふ

あるては、事いふ人とは、是とせり。いふに、邦といふ事と、つゞけぬけの、私言希ふ。
こゝに、楠三代忠義を身とて、あそと捨て、こゝに、末代忠義の名の、めりこゝた
といふ後、目と捨る志、有りとも、是二心、二心、君子の、胸に、忠義、譲が、修す、趙孟
仕、ざる志、き、古人の、歎、称、ある、如、此、呼、西、後、の、志、を、万、世、の、師、と、ま、つ、尊、し、し、許
者の、如、く、つ、り、は、將軍、は、仕、つ、て、明、と、清、内、は、病、死、せ、バ、代、忠、義、と、さ、う、父、兄、の、面、と、堀、ん
の、也、中、庸、曰、邦、道、な、き、時、を、死、す、る、迄、愛、せ、ん、と、ま、つ、正、後、の、謂、こ、へ、し
が、こゝに、堀、は、如、く、如、此、志、と、愛、せ、ざる、愛、と、父、兄、は、ある、あ、い、さ、う、も、なら、し、謀、の、道、
と、生、質、の、不、也、不、器、と、い、ふ、べ、う、は、評、者、を、志、づ、く、西、後、と、さ、う、功、利、の、心、を
見、る、時、を、わ、り、有、い、し、道、を、見、る、時、を、間、然、と、さ、う、な、し、父、兄、の、時、上、順、こ、西、後、ハ、道
堀、は、如、く、志、と、失、つ、ざる、も、れ、也、是、を、思、ふ、と、一、二、と、あ、げ、う、い、ふ、の、も、能、き、こ、と、く
堀、は、如、く、人、只、自、己、心、解、の、天、理、を、主、と、し、て、是、を、詳、し、し、可、なり
一、建、武、三、年、二、月、八、日、當、氏、忠、義、旅、播、州、官、軍、は、如、所、旅、播、州、船、は、お、さ、さ、う、西、に、
下、ら、さ、う、尊、氏、亦、一、方、の、事、と、い、ひ、也、し、あ、じ、は、な、く、也、思、ふ、こ、と、ん

漕むのふかきを河のしの浦にあらうとて、れや、我思ひに、
細川和長さうつてん

この、まの、これ、を、あ、さ、う、の、お、つ、と、い、ふ、さ、さ、さ、し、な、道、の、道

一、東、武、重、芳、野、の、も、あ、は、何、公、し、て、養、し、る、い、づ、こ、も、親、王、は、あ、し、御、下
向、ち、よ、と、バ、西、海、道、を、ゆ、く、官、軍、は、属、一、む、且、の、を、運、と、い、ふ、の、端、た
ち、ら、づ、と、中、り、色、は、後、醍、醐、帝、が、い、ふ、と、思、ふ、則、ち、父、の、も、子、一、品、武、敏、卿、懷
良、親、王、と、征、西、將、軍、は、な、し、あ、う、也、奥、国、元、年、三、月、芳、野、と、さ、う、也、は、ひ、法、如、
御、下、向、ち、よ、と、バ、西、海、道、の、代、よ、う、也、は、ひ、色、を、東、池、武、威、と、い、ふ、と、い、ふ、は、列
一、統、の、切、と、な、り、ゆ、り、と、い、ふ、も、親、王、と、え、来、玉、樓、鳳、閣、の、裏、長、と、い、ひ、平、生
詩、言、は、た、強、と、の、こ、事、と、さ、う、也、は、ひ、色、は、都、の、御、と、い、ひ、所、を、い、ふ、と、い、ふ、し、い
と、懶、さ、う、月、と、さ、う、也、は、ひ、さ、う、有、時、の、御、言、は、

目、は、さ、う、と、の、め、を、ん、と、い、ふ、あ、あ、い、と、い、ふ、世、の、事、と、い、ふ、
志、い、ふ、は、世、と、北、風、の、吹、め、く、は、風、と、さ、う、な、つ、が、心、う、井、

あり者多し可有心好事

一為武士金銀を貯へ好利慾或き商人は交る者多し必可減武姓賞也云
益事并好利潤也賞利口の者ハ元来商人也其姓と云可同一
入水無益鶴有山云能元来武姓ハ武利根也

一西暦徳代の書志在系不可過三千年一似系方の風流一則を減武
常子一不可得勝利必市朝の寄宿と可林事
省畧之

右世遺書子と孫と迄と送傳之し若世教訓は背く則
志家の滅亡疑ひある處うべし仍て書一訖

延文二年二月日

○後太平記

一 前記律則祐按律有馬あり一苗の相と極むる

音さきく 鼓 鼓はしあきん色は上ハハキとせん月の花

右同

山名位是守時氏今川上總次泰範等捕西儀の儀りる千劍破の儀と攻り色
とと流石名とわし補は西成文と凝て染るる名律り色と中と攻る

一 子孫ありしは金別山の峯より重一郡起る疾風掃と倒一激雨

降と云く陣氣朦昧と不安寄は信濃は信濃是事なり千劍

破の林危る義経と云く二の隊有と昨日捕獲る美墓の家也と

懐き強き娘の旗と波り戦悔ありと色と何者の仕事なり義経と

義経と美娘と云く破る後 義経ありる天が下 う那

一 郡の急を捕はるる鬼あり山名位是守と追ふる一うり

捕はるる魂を平一げは山名と追ふる修更る 出天

又々川を海軍の時城の系なる古川より岩る馬と云く危なり色と

々川の岩る名と云く流一つ危なりる 世とむも川

泰範そ日杭の皮の羽織と云くあらき一めど

今川が化けの皮と云く軍一と云く一の肩の皮と云く

延文二年の秋後醍醐天皇假山中の皇居と被と云く是と南朝の天初と云

少知光明院の暦應二年より南北は二帝の統基と傳ひ張る朝儀と云く

○續太平記

る末代と云ふは思ひやうなる事と云ふは何者と云ふも都の内裏の日暮門
の傍よりこれと建つ二首の庭園と云ふ事なり

むかしより守北野の末庭と云ふ二王立と云ふなり
仁王の二王はなりし世の中きアともうともいひさざりなり

明德三年の事なり此頃悉く太皇太后と同年の夏島山尾張守兼深河内守
は於て南方餘黨の属と破りさへられ居候と云ふし千坂屋金剗山の奥と云
阿なぐ討随つて色は捕ら馬匹匹勝候是處國は跡と可留ねなくと漂泊と
すく一む今冬南朝の廢廷は有りと不見と云ふと近年諸國は官方と云
者なくぬと云ふ名計り世にあり者さへ有と云ふ如くぬれ唯は楠計りこそ
勢に流るるゆへし今も島山入道の御知は退運と南方水奥の君代也代の跡
迹は果めさき世の中いとも慙く思ふぬと云ふなり楠少次郎西元きぬ何は
とて將軍と云ふは通なり一と云ふ打違と云ふ遺恨と教むと云ふ
あひびく事より容れぬなり同様の事月あねが御目代浦上七郎兼尉行系が

右同

為すは捕色あることを云ふは色捕氏數代り云々と云ふは思ひやうなり
彼者と云ふは思ひやうなりと云ふは思ひやうなりと云ふは思ひやうなり
云本文なりは者の本なりと云ふは思ひやうなりと云ふは思ひやうなり
本の所なりは思ひやうなりと云ふは思ひやうなりと云ふは思ひやうなり
家四世遂に思ひやうなりと云ふは思ひやうなりと云ふは思ひやうなり
不信と云ふ將軍が墓は思ひやうなりと云ふは思ひやうなりと云ふは思ひやうなり
昔の筆の如き思ひやうなりと云ふは思ひやうなりと云ふは思ひやうなり
じと見し思ひやうなりと云ふは思ひやうなりと云ふは思ひやうなり
野殿は思ひやうなりと云ふは思ひやうなりと云ふは思ひやうなり
昔三種の神思ひやうなりと云ふは思ひやうなりと云ふは思ひやうなり
洛西岐嶺の大宮を思ひやうなりと云ふは思ひやうなりと云ふは思ひやうなり
龜山院と云ふは思ひやうなりと云ふは思ひやうなりと云ふは思ひやうなり
昔此等の思ひやうなりと云ふは思ひやうなりと云ふは思ひやうなり

右同

さうべと神やき乾く十月何と雲の色を降ふ
遂に寛永七年の夏初年七十四歳にて薨^ハたひくもや浮沈はるる窮
達今も娘ぬるまゝなめり痛しむるし事ごとく
雄略天皇の所宮は濃州本^{モトス}の郷より酒泉涌ありそと長老の水とい
號しとあや去の世心とよめるなり

同

さうと朝家忠有し細川武敏守頼之と終はり將軍並海士の如
常と常り康暦元年の夏か國へ可被遣下りまゝて色も同五月甲午年そ
髪と剃し四^ツも下ら色も撫澤とあるそ入道部と故言と遊り
浦風の淺は弱る明方と沙は任ちる船かとも出る
日初^ハはるるやうもあしめど白嶺とある被^ハ徒るまは後時^ハ後院の身
らね山とと記しあるわし鹿角とあるといと差なき記あるはこれ月日の終
るるなき哉

閑

閑りるんの中や松陰の水よりと杉原しめらん
山里ハ物の寒うき事いふれなど例の海^{ミヅウミ}元はき故言ちせども此被^ハ
となくお吟らる一年もさる有て舟渡の山國は鹿^{イノヤコ}鹿也し事とも思へど
なきむのしうかとも松原のぬるもやとある

い

いのそもかろく月乃山里とあるれ原もど水もいめ
松江の風^{フエ}芦^{アサ}岸の漁^{イサ}所もと母と慰むよしとあしめどかろく今も
賢^{カシコ}ふも世と逃つる者も被^ハ思るさきも云貴の讃^{シメ}ハなき掩^{オモフ}信事
なめりあるもや遂に無^ム事よし原もく二回遊^{ウツ}雲臺之花^{ハナ}子孫^{イイダ}日折^{ヒサ}年の

日は宿色り

同

將軍並海東行の時彼有家参^{マカ}渡氷と布る海客^{カイヤク}が原と詠めし事など
思ふもさきと斯^カなりん

同

きのあもて富士の山^{ヤマ}もんし雲の袖もとうの田見の浦^{ウラ}浪
大内み入道有^{アリ}繫^キと頂^{タカ}年より山見^{ヤマミ}忍^ニ賞とある家業とある

そと大軍を起し攻より弔い軍して我々屍の上の血を雪ふと申すを以てし
中にも何れ今一度の痛き合戦や有んぞんと人々思ひけるは常にお達
しと云ふも又の討死せし中よりとて後京都より歸り降参の由と申され
枉ぐ弘教免より満ちて希有な命賜り下順と申す
大内を乞ふの由頭ハ和泉
紀伊 河内 長門 豊前 豊後
数々の名園なり
そとに色こそもそとに色こそも
そとに色こそもそとに色こそも
所引りたりれぬと云ふ大内と云ふつと云ふを翻して云ふは是を
爲す所の人々後来大行、不顧細瑣といふ大乳大力の仁らぶを角こそ有るべし
を跨下の羞を肯て不顧と還てけんと見ゆるさこそも曾先通に神
伐傷の詞は解嚴毅之類、問難發之口、錢多者、鬼前、錢少者、
鬼後、無德貴、無勢、勢排金門、入紫闥、殆可使安死、可使活
貴、可使賤、生、可使殺、錢所祐、吉、無不利、諺曰、錢無耳、可使

鬼神鬼凡、今人、唐、錢而已也と書くものなりと理うとて是と云ふ者も
父の仇を復し、不戴天といふは東九帝祐清が頼朝に不仕しゆきと似ぬ
今の海に、若動うると思ふ人も多うなり

應永十三年五月、義満公即年五十一より薨し、おひしめ、日野有光卿と勅
使として、藤原氏に上、天皇の爲、御下しめ、支持公勅使、對面し
江の三度、戴之、披し、拜え、あひる人臣と、そ太上のる、あつ切は、必入て、
末代と云ふ、いふ、去事、可侍、と、臣進、と、ひる、就之、と、世々、祖恩の、系、事、
と、教る、曾祖、相國の、身、罷て、侍、つる、祖、父、義、隆の、爲、つぎ、是、し、かれ、
と、勅、言、は、し、り、る、今、の、お、め、る、思、ひ、あら、も、て、り、や、と、

佐山 趾多しむ、いふ、是、き、も、降、ら、せ、道、を、せ、し、め、り、る、
主上、後、小松院、世、を、や、ら、せ、張、家、の、名、を、人、臣、の、後、を、義、隆、に、計、め、と、
そ、い、ふ、は、あ、ら、う、と、も、り、さ、き、さ、う、り、る、

將軍義持公の門連被大納言義嗣卿と申すは、謀反を企てしるが邊り

同

同

寛永三十年戊持公の所長男量卿市年十七果て大樹の所讓りを受
 たるはひて征夷將軍の宣旨と蒙り給ふ目おこりし事た也めりるや同
 三十二の年九月新將軍而不豫の事有と聞くるが二月廿二日市年十
 九の早き日ひより天下の武の志士一たりび皆て又丹波所長
 の所讓りしと聞くはめりし柿大臣の世若公と育て給ひし軍月の
 中よりそし又所長は訓初めし若の所心とし所長事とそめりし
 ち長のいさぶ官大抵言よりや減とそめりし所心は二十九の早き日
 公卿中の所心はとそりし世の人やんこと宮原の所心などとも面
 凡のいさぶと絶言何なる所心宛や遂すそれと絶言はる也と
 ちし唯めりし入る所心は彼所長所心よりハ鳥九賢康卿の
 所息也より所心は深窓の中より長女大桃の婿と三十五の早き日
 是は月桂と情も顔ハ毛墻西施と郵袂程式あるよそとそめり
 ちやんちの事なりと觀例うも烈しと南庭の千種の花のちと折せ

かり風蕭疎とて根藉するは亞相唯獨り若干となく所心と傷
 ちひる所と何なるも知れば風は初り初るは越丹凡の所長と
 是より取上見あつては深窓の中より長女大桃の婿と三十五の早き日
 誰とさそ哀を過せんこれな後やするは所心と
 人とも花きなど著終しるは傳げに初り初るは越丹凡の所長と
 の移り最死時より思ひおきしと所心は初り初るは越丹凡の所長と
 あつてんとそめりし誰とそめりしは初り初るは越丹凡の所長と
 は明きめりしは深窓の中より長女大桃の婿と三十五の早き日
 を後き混あつては深窓の中より長女大桃の婿と三十五の早き日
 ぬる所心は初り初るは越丹凡の所長と
 所認に初り初るは越丹凡の所長と

人—をぬめりしは初り初るは越丹凡の所長と
 初り初るは越丹凡の所長と

其考より後よりおーと書き式部卿恒明を兄果ぬ
 美の餘波と慕うるを思ふに親友の中の意也所母所皇所の彼ノ
 申別この日より思ふとて思ふるをたのめと書曉法師が
 何なりと云ふと顔色ぬ面影の身は傍にても思ふに
 と痛し身遠くはつれなくせうひる目には涙の所縋るや所々例なくびとを
 打伏し泣くが一周も未竟は其の思ふに大丘後の所なり
 おしとめと程後なるし昏は痛く晨は起る床を何とぞも
 目が重いと云ふその面影よりも不眠何に付とも思ひ難き所
 心弱さのへりしとてあることなとあはし出さる

一 後太平記
 將軍教教公富士山所施儀の時の所係

澤をし思ひつゞけく嘆く或何と云ふ一づの終り尾
 音果つる秋の信と明日やんて旅の泪を痛と云ふ

思ひ離る下づやねすのさけに誰が枕をさぬやわら
 富士の指しねる山とてなれそとてさうと人よ後ん
 なる余もその所憂と云留
 くらむとて顔ひ満める涙見返心をさし不を海めと

所寄

秋さむと富士の山もさうの離る坂

祢乃しめつ 卷之三終

入
 昭和13年7月31日
 24457号



